

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol. 18 No. 2

平成 25 年 12 月 1 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

- ご挨拶
- 第 19 回 総会・研究会を終えて
- 準世話人リレー連載：
島根大学医学部附属病院 緩和ケア病棟から～
- 第 10 回 医学生への緩和ケア教育のための
教員セミナー参加報告
- 日本緩和医療学会 大学病院フォーラム開催報告
- クールダウン エッセイ



ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

大学病院の緩和ケアを考える会 代表世話人 高宮有介（昭和大学医学部）

11 月に入り、今年も僅かです。時間が過ぎるのが早いですね。宿題が、あれも、これもと気になりますが、目の前の課題に集中し、人生という時間を大切に使っていきたいと思います。

9 月 7 日に、第 19 回の総会・研究会が、聖マリアンナ医科大学病院で開催されました。チーム医療のテーマに沿った多職種からの発表で、大変、盛り上がりました。お骨折り頂いた鈴木直教授、西木戸世話人、沼里世話人、および聖マリアンナ医科大学のスタッフの方々、当会世話人の皆様に心から御礼申し上げます。

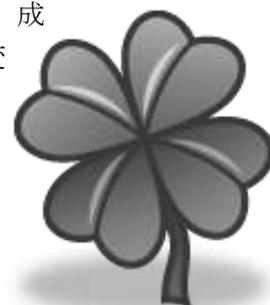
さて、患者・家族の心のケアも大切ですが、そこに向き合う医療者の心のセルフケアも重要です。10 月 17 日～20 日に、カナダのモントリオールにある McGill 大学で、第 1 回 Whole Person Care 世界大会が開催され、参加いたしました。医療者自身の精神的なセルフケアについて、講演やワークショップなど、盛り沢山の 4 日間でした。セルフケアのプログラムは、McGill 大学の医学生に必修化されており、来年、教育の詳細を学びに行く予定です。

充実した研修でしたが、往路は台風 26 号の直撃で大変な旅となりました。成田発の 11 時の便に向け、早朝に家を出たのですが、全ての電車が止まり、成田空港は陸の孤島となりました。成田まで 50km の京成線の駅まで何とか辿り着き、後輩の医師とタクシーで成田に向かいました。タクシーに乗って、ほっとし

たのも束の間、高速道は通行止め、一般道は冠水し、通行止めの場所が多数ある危機的状況でした。タクシーの運転手も慣れない道で逆走することさえあり、車内は重苦しい雰囲気となりました。私もイライラして、運転手に怒りさえ湧いてきました。

そこで、ハッとしました。自分はこれから自分自身の心のケアの研修に行く。困難な状況は変わらなくとも、自分の心は変えられるというのがテーマだった。この状況は変わらないが、この時間をどう過ごすかは自分次第と気付きました。そして、以前、飛行機が飛ばなかったが、よい出会いがあった過去を思い出し、語りました。それは、医学部の卒業直後、アフリカの難民キャンプであるソマリアに行った時のことです。格安の飛行機で行くはずでしたが、定員割れで飛ばなくなり困っていたところ、英国航空なら 1 席空席があり、急遽、乗り込んだことがありました。乗継空港も知らないままでしたが、同乗した日本人と仲良くなり、一緒にお酒を呑みました。それが俳優の原田芳雄でした。

そんな話をしていると、年老いた運転手が急に、「原田は親友だった」と話し始めたのです。高校の同級生の悪友で、数ヶ月に一回は酒を酌み交わす仲だったとのこと。運転手のライフレビューを聞き、車内の空気は一変。運転手も近道を模索し、成功すると私達も拍手。気持ちを変えると自分自身も変わるし、運命も変わるなあ、カナダの研修前に納得した出来事でした。カナダで学んだことは、またの機会にご紹介したいと存じます。



第19回総会・研究会を終えて

聖マリアンナ医科大学病院 西木戸 修

2013年9月7日、聖マリアンナ医科大学病院3階大講堂で第19回大学病院の緩和ケアを考える会総会・研究会を開催しました。残暑のなか、関東地方を中心に151名の方に参加して頂きました。聖マリアンナ医科大学では、1998年・第4回、2003年・第9回に続いて、3度目の開催となりました。第4回では「患者は最後の時をどこで過ごしたいのか」、第9回では「立ち上げよう！緩和ケアチーム」でしたが、今回のテーマは「多職種で支える緩和ケア」としました。このテーマを踏まえ、シンポジウムは「多職種で支える緩和ケア in 聖マリアンナ医科大学」としました。医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、臨床心理士、社会福祉士がシンポジニストとして各々の立場から大学病院の緩和ケアについて発表して頂きました。このシンポジウムを通じて、普段はあまり聞くことができない職種から熱い思い、実践について聴くことができたのではないのでしょうか。

今回、教育講演の一つをランチョンセミナーに変更して、昭和大学 内科学講座緩和医療科学部門樋口比登美教授に昭和大学病院緩和ケアチーム活動報告について御講演を頂きました。昼食を頂きながら、今回

の研究会の最初の御講演に相応しく、多職種支える緩和ケアチームについてご教授を承りました。会の最後の特別講演では、がん・感染症センター都立駒込病院 緩和ケア科栗原幸江先生に多職種間のコミュニケーションについて御講演頂きました。病院内では、それぞれの立場、役割がある中で、他人を尊重し自分を大切にすることが、コミュニケーションに大切であると再認識しました。

研究会参加者の方々に、アンケート方式で大学病院の役割についてお聞きしたところ、チーム医療のモデル(71.3%)、研究機関(67%)、教育機関(54.8%)とのことでした。この研究会を通じて大学病院の緩和ケアとは・・・と考えながら仕事ができればと考えています。最後に本研修会を開催するにあたって多大なご協力を頂いた三宅良彦学長、黒子幸一聖医会会長、腫瘍センター緩和医療部会の仲間感謝して筆を置かせて頂きます。



☆準世話人リレー連載 大学病院における緩和ケアを考える☆

島根大学医学部附属病院 緩和ケア病棟から～

島根大学医学部緩和ケア講座 中谷俊彦



皆さん、こんにちは。神在の園(くに)、出雲にある島根大学医学部からのご報告を致します。平成23年6月に新築された病棟の5階に緩和ケア病棟が発足してから2年以上の時

が流れました。全室個室で21床、5階なのに花壇付きの広大なガーデンがあるという(4階の屋上を利用しただけ)、明るい病棟です。毎週病棟カンファレンスの後に回診がありますが、その中の1コマを切り抜いて、皆様に録画のない中継をさせていただきます。～ご家族が多く集まっておられる、とある患者さんの病室で。

教授 (いつもの自然で爽やかな笑顔)：こんにちは、今日は回診なのでお邪魔しますね。お身体の具合はいかがですか。

患者さん：ええ、まあまあいいですよ。

教授：ではちょっと胸の音を聞かせて下さいね(その昔購入していた、でもあまり活躍できていなかった、

ちょっとお高い高性能聴診器が白衣のポケットからさりげなく登場)。

[字数の関係で、途中をワープします]

教授：(病室に飾ってある額に入った立派な魚の刺繍作品を見つけて)これは見事です。きれいですね。魚がお好きなのですね。(病室内の患者さんとご家族に、和やかな笑顔と穏やかな空気が漂う。するとそこに)

某医師：教授、そのお魚がどんな魚か、もちろん名前をご存じですよ(控えめな島根県民だが、日本海の魚にはちょっとうるさいので、当然のツッコミ)。

教授：もちろん！私が知らないわけではないでしょう、ははは。(刺繍の魚はピクリとも動かない。しかし、*眼が泳いでいる*、教授)

～微妙な、ビミョーな、一瞬の時が流れる(よくある硬い空気の無言の世界→さあ、どうなるのだ)。すると、空気が読める心優しく聡明なご家族がさりげなく、

ご家族：これは鰯(ぶり)ですよ。

教授：そうそうそう、ぶり、ブリ。これは誰にでもわ

かる良い鯛ですねえ。ははは（いつもとは違う、誰が見ても爽やかではない笑顔）。ではお大事に、失礼しますね。

～患者さんとご家族達の和やかな笑顔の中を、いつものように爽やかに退室する教授回診なのでございました。

出雲は縁結びの地です。昔の「白い巨塔」だったら、ツッコミの某医師はどこかに消えて居なくなっていると思われませんが、優しいこの病院の片隅で今でも生

息しているようです。今週もまた、島根大学医学部附属病院の緩和ケア病棟教授回診が始まります。患者さんにご家族の皆様の「これでいいのだ！」と思う気持ちを支える緩和ケアの提供と、医療スタッフが1つでも「これでいいのだ！」と言える緩和ケアの実践のために。それでは、来年6月の第19回日本緩和医療学会学術大会でお会いしましょう。皆様の暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。



第10回 医学生の緩和ケア教育のための教員セミナーに参加して

日本医科大学武蔵小杉病院麻酔科 赤羽 日出男

台風27号が接近する10月26日(土)、27日(日)に開催された第10回教員セミナーに参加いたしました。滋賀県、京都府、岐阜県、鹿児島

県などからの申し込みがあり、初日は到着が危ぶまれましたが無事に全員がご参加いただけました。本当に良かったです。私は自院での緩和ケア公開講座があったため遅れての参加でしたが、高宮マスターのワールドカフェは素晴らしい時間だったとお聞きしています。「緩和ケアマインド」という、日常ではなかなか語る機会のない、そして何よりも大切なものについて意見を交換する貴重な体験だったとの声が多かったです。

公開講座を終えて、240分間のグループワーク途中での参加となりました。まず、240分という驚きの時間設定は絶妙と考えます。だれる事無く、しかし余裕をもって模擬授業という課題に取り組みながらグループ・ワークのメンバーとの交流を深められました。時に雑談を交え、時に集中してスライド作成を進めていくあつという間の時間でした。参加メンバーのグループ分けには入念な配慮をいただいたと思われま

す。着目して聞かせていただいていた

懇親会だけでなく二次会にも多くのメンバーの参加があり、非常に楽しめました。同じ、志を持つ者に垣根はないと感じられました。

翌27日は作成したスライドの最終確認と模擬授業のリハーサルを2回行い、修正点を洗い出す作業を行いました。この際に周囲の声に影響を受けないよう別室を用意していただいた事は大変、ありがたかったです。模擬授業では、学生の参加があつて非常に良かったと考えます。彼らにとつても緩和ケアのみならず医療というものを見つめ直すいい機会になってくれればと思います。模擬授業は15分という限られた時間の中で作り上げたものとしてはそれぞれに完成度が高かったのではないのでしょうか。学生を引き込もうとする参加型授業を目指す姿勢が随所に見られ、よりメッセージを伝えようとする組み立てが感じられてよかったです。物事を伝えようとする時には、なるべく自分の言葉で語り、メッセージを込める事が大切だと再確認しました。ビデオ撮影したものを振り返りとして観るのは非常に参考になりました。自分の姿を客観的に観るのは一番の反省材料と思われま



初めての大学病院フォーラム開催報告

横浜市立大学附属市民総合医療センター 化学療法・緩和ケア部 斎藤真理
(大学病院フォーラム企画担当者)

2013年6月21日、横浜において開催された日本緩和医療学会のプログラムのなかで、第1回の大学病院フォーラムが開催されましたので報告いたし

ます。座長は高宮有介(昭和大学)、斎藤真理のふたりが担当しました。

このフォーラムは、全国の大学病院における緩和医療の実践報告と問題点の共有、今後の日本の緩和ケアを推進するプランを討議することを目的にしています。

1 番手は、東邦大学、中村陽一医師でした。全国 80 大学医学部、医学科附属 139 病院を対象とした調査報告（回収率 47.5%）がなされました。チーム医療が大学病院の緩和ケアの主体になっていると総括され、課題としては、多職種の協力、主治医／看護師とコンサルテーション型チームとの共働などが挙げられました。2 番手には、弘前大学、佐藤哲観医師が登壇してくださりました。ペインクリニックから始まり、6 病床を有する緩和ケアチームで症状緩和から看取りまで行うようになった経緯を説明されました。院内の多職種と根気強く連携を保つことで、教育的な効果が上がってきているそうです。3 番手としては、山梨大学、飯嶋哲也医師にお願いしました。緩和ケアチームが始動して 10 年になるそうですが、医師の異動の早さ、それに伴う関係性の構築の繰り返し、質の維持の困難などについて指摘されていました。大学病院であっても、十分な緩和ケアを提供できるようにしなければならないという気概が感じられました。4 番手としては、次回緩和医療学会会長の島根大学、齋藤洋司医師にお話ししていただきました。年々講義数を少なくする傾向の医学部卒前教育の中、島根大学において緩和医療に関する教育時間数を確保している工夫



〇〇クールダウン〇〇

第 37 回日本死の臨床研究会 in 松江、今回も、ただ“参加する事に意義がある”姿勢でのお気軽な参加となりました。更に、4 人の乙女旅？と称したツアーをコーディネートし、そしてレンタカーでのドライブまで引き受けてくれた同僚に感謝しながらの、2 泊 3 日の初山陰でした。

まずは、何をにおいても、60 年に一度の大遷宮を終えた出雲大社でしょ！と、米子空港から直行し、遅めのランチに出雲そばを頂いてから、出雲大社の正面から鳥居を潜り参拝。駐車場からの近道もありましたが、より多くのパワーを頂くのには、正面からが正解だったようです。しかし、参拝の方法は見様見真似、意味のないお賽銭でも御利益があったと信じて、次に八重垣神社へ。縁結びで有名な八重垣神社では、「鏡の池」で良縁を占い、年甲斐もなく、ここぞとばかりに大騒ぎしました。『やさしい人さずかる、東と南、吉』と占い和紙のお言葉を頂いた私に、「もう既に授かっているじゃないですか！」と自分たちを指した同僚の言葉に苦笑。その同僚は、自分の占い和紙の言葉を読ん

と努力を報告してくださりました。また、研究成果をいかに臨床に活かすかも重要であると語られ、患者が安心して死を迎えることができる緩和ケア病棟は大学病院にも必須と考えていると述べられました。



最後に、この学会の主幹、藤田保健衛生大学から森直治医師に登場していただきました。藤田保健衛生大学で多面的に緩和医療を展開している現状を報告されました。医局として多くのスタッフがそろい、臨床、教育、研究において切磋琢磨できる恵まれた環境であることが伝わりました。

質疑応答においては、他の大学数校からそれぞれ独自の困難さが呈示されました。コンサルテーション技法、研究推進力、学生・後輩医師の人心掌握術などに関するやりとりが活発になされました。緩和ケアの中でも、大学病院という場における特殊性があると思われれます。来年も多くの大学の報告が、多職種からなされることを希望しています。

聖マリアンナ医科大学 看護部 沼里貞子

でない、何故なら、早く沈むようにコインを投げ入れてしまったから。本人は認めていませんが、良縁を得る為に狙い定めた戦略がこんな結果終わる、今回の珍道中エピソード No1 でした。

玉造温泉は、とっても良かったです。流石の美肌効果日本一を体感し、真心のこもったおもてなしに本当に満足しました。その後、勾玉選びにかなりの時間を費やした結果、太陽のエネルギーを象徴する効果を持つという、大きなシトリンを購入。すると、「今以上にエネルギーを貰って如何するんですか？」と同僚からのコメントに、改めて自覚していない自分の一面を認識した一瞬でした。

研究会を程々に切り上げ、足立美術館へ向かい 5 万坪の日本庭園のすばらしさにとっても感動し、そこを勧めしてくれた方との縁に感謝。

5 年程恒例となっている死の臨床研究会ですが、今回もパワースポット開催ならではのエネルギーを得たのか、日ごろの疲れを癒し、緩和ケアを推進するものとしての自分のありようを考えた 2 日間でした。

信念を持ってチャレンジ、そして継続する、勾玉を身に付けて！